

原 著

理学療法学科学生の性別における 職業興味傾向についての検討 (VPI 職業興味検査を用いて)

第2報

An Analysis of the Vocational Preference of Physical Therapy
Majors on a Gender Basis: Using the Vocational Preference Inventory
(The second report)

越智 淳子

Junko OCHI

白星 伸一

Shinichi SHIRAHOSHI

抄 録

2011年度から2013年度の理学療法学科2回生に在籍した学生を対象に、職業興味に対する検査（VPI検査）を用い、性別による職業興味領域の差異を検討した。その結果、男子ではSRI（社会的、現実的、研究的）、女子ではRSI（現実的、社会的、研究的）のパターンを示し、上位3つは同一の興味領域となった。また、6領域の尺度それぞれに対して男女での比較をした場合、男子がE（企業的）、C（慣習的）尺度において、有意に高い値を示した（ $p < 0.05$ ）。

キーワード ■ VPI 職業興味傾向、性別、理学療法

1 はじめに

国家試験受験資格に直結する医療従事者の養成学科に入学する多くの学生は、入学時に既に4年後の進路を決めている。このような背景をもって入学している学生に対して教員は、学生達が該当職種にどの程度の興味・感心をもっているのか、また職業に対する興味の特徴、職業認知における特徴を理解することが重要である。

個人の職業興味領域に対する興味・関心の強さを知るための検査とのひとつとして、VPI (Vocational Preference Inventory) 職業興味検査¹⁾がある。このVPI職業興味検査は、国内では多用されており、理学療法士を目指す学生を対象とした報告もなされている。しかしながら、理学療法士養成クラスにおけるこれまでの報告^{2~5)}では、性別に対する検討は行われていない。

そこで本研究では、単年（2011年度）の報告となった第1報⁶⁾に続き、2011～2013年度の理学療法学科2回生に在籍した学生を対象に、性別による職業興味領域の特徴について検討を行った。

2 対 象

2011～2013年度の理学療法学科2回生に在籍した66名を対象とした。検査の実施に先立ち、本研究の目的、検査方法を説明し同意を得た学生を対象とした。男女の内訳は、男子36名（2011年度18名、2012年度12名、2013年度6名）、女子30名（2011年度12名、2012年度8名、2013年度10名）、年齢は、 19.6 ± 1.0 歳（男子 19.8 ± 1.2 歳、女子 19.4 ± 0.5 歳）であった。

検査の実施にあたっては、佛教大学倫理審査委員会の承認（承認番号H25-13）を受け行った。また、検査への参加率は、全対象者117名（男子64名、女子53名）に対し、56.4%（男子56.2%、女子56.6%）であった。

3 方 法

(1) 検査内容

検査にはVPI (Vocational Preference Inventory) 職業興味検査（第3版）を用いた。これは160の具体的な職業に対する興味・関心の有無を回答することにより、6種の職業興味領域と5種の傾向尺度に対する個人の特性を測定するものである。6種の職業興味領域は、①R尺度（Realistic Scale：現実的興味領域）、②I尺度（Investigative Scale：研究的興味領域）、③A尺度（Artistic Scale：芸術的興味領域）、④S尺度（Social Scale：社会的興味領域）、⑤E尺度（Enterprising Scale：企業的興味領域）、⑥C尺度（Conventional Scale：慣習的興味領域）で示され（表1）、6つの尺度を1セットとして職業の世界と個人のタイプを関連づけられるように構成されている。なお、VPI職業興味検査では、この職業興味領域の測定と同時に、傾向尺度と呼ばれる個人の心理的傾向についても検査が実施されるが、本研究では興味領域の尺度について検討した。

表1 VPI 職業興味尺度における興味尺度の種類と内容

興味領域尺度	
① R 尺度 (現実的興味領域)	機械や物を対象とする具体的で実際の仕事や活動に対する好みや関心の強さを示す尺度
② I 尺度 (研究的興味領域)	研究や調査などのような研究的、探索的な仕事や活動に対する好み関心の強さを示す尺度
③ A 尺度 (芸術的興味領域)	音楽、美術、文芸など芸術的領域での仕事や活動に対する好みや関心の強さを示す尺度
④ S 尺度 (社会的興味領域)	人に接したり、奉仕したりする仕事や活動に対する好みや関心の強さを示す尺度
⑤ E 尺度 (企業的興味領域)	企画や組織運営、経営などのような仕事や活動に対する好みや関心の強さを示す尺度
⑥ C 尺度 (慣習的興味領域)	定まった方式や規則に従って行動するような仕事や活動に対する好みや関心の強さを示す尺度

独立行政法人労働政策研究・研修機構
VPI 職業興味検査 (第3版) 手引

(2) 実施・処理方法

対象者に対し検査方法を説明した後、一斉に検査を実施し、検査終了後、対象者に採点を行ってもらった。検査の実施時間は10分程度、採点は15分程度であった。採点表は回収し、採点によって得られた素点は、「VPI 職業興味検査 (第3版) 手引」¹⁾に従って、興味尺度領域のパーセンタイル順位 (基準集団の中での個人の位置づけ) に換算し、各尺度の平均値を求めた。また、6つの興味領域尺度のうち、職業興味の最も強い領域 (パーセンタイル順位値の上位) から上位3つの記号を並べたものを「興味パターン」とした。

各尺度における男女間の比較については、Shapiro-Wilk 検定を用いて正規性の確認を行い、いずれの尺度においても正規性の仮定が否定されたため、Mann-Whitney の U 検定を用いた。なお、有意水準は5%未満とした。統計解析ソフトには IBM SPSS Statistics ver.20 を使用した。

4 結 果

(1) 全体の平均パーセンタイル順位 (表2, 図1)

全体では R (現実的): 50.9, I (研究的): 45.8, A (芸術的): 38.9, S (社会的): 49.5, E (企業的): 36.5, C (慣習的): 35.1 となり、興味パターンは, RSI (現実的, 社会的, 研究的) であった。

(2) 男子の平均パーセンタイル順位（表 2，図 2）

男子では R：51.7，I：50.5，A：40.0，S：53.5，E：42.1，C：39.0 となり，SRI（社会的，現実的，研究的）のパターンを示した。

(3) 女子の平均パーセンタイル順位（表 2，図 2）

女子では，R：50.5，I：39.0，A：37.5，S：40.8，E：25.7，C：26.0 となり，RSI（現実的，社会的，研究的）のパターンを示した。

(4) 男女による興味尺度の比較（表 2）

6 領域の尺度それぞれに対して男女で比較をした場合，男子が E（企業的），C（慣習的）尺度において，女子よりも有意に高い値を示した（ $p < 0.05$ ）。

表 2 職業興味領域尺度の平均パーセンタイル順位

全体	性別	p 値 (男性 vs 女性)
R（現実的） 50.9 ± 28.3	男 51.7 ± 29.9	0.897
	女 50.5 ± 27.4	
I（研究的） 45.8 ± 30.6	男 50.5 ± 32.1	0.509
	女 39.0 ± 25.2	
A（芸術的） 38.9 ± 25.6	男 40.0 ± 26.9	0.511
	女 37.5 ± 24.1	
S（社会的） 49.5 ± 26.5	男 53.5 ± 25.2	0.058
	女 40.8 ± 27.5	
E（企業的） 36.5 ± 23.8	男 42.1 ± 26.9	< 0.05
	女 25.7 ± 13.2	
C（慣習的） 35.1 ± 27.6	男 39.0 ± 30.0	< 0.05
	女 26.0 ± 20.6	

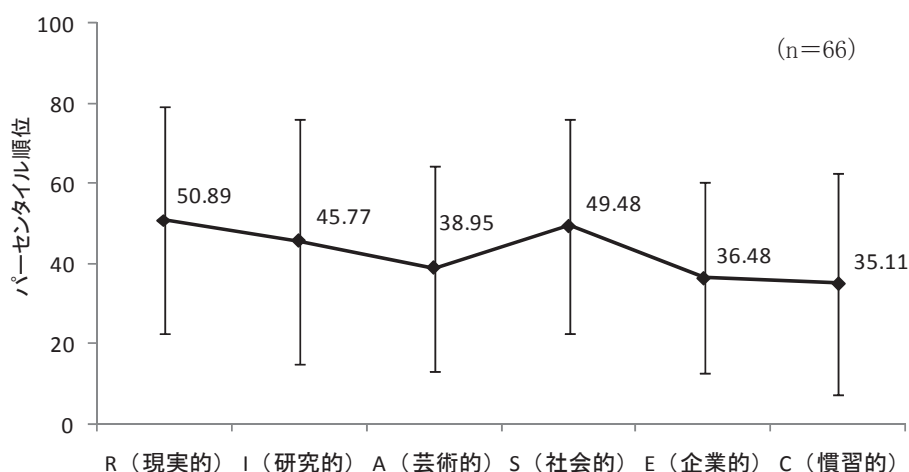


図 1 被験者全体における職業興味領域

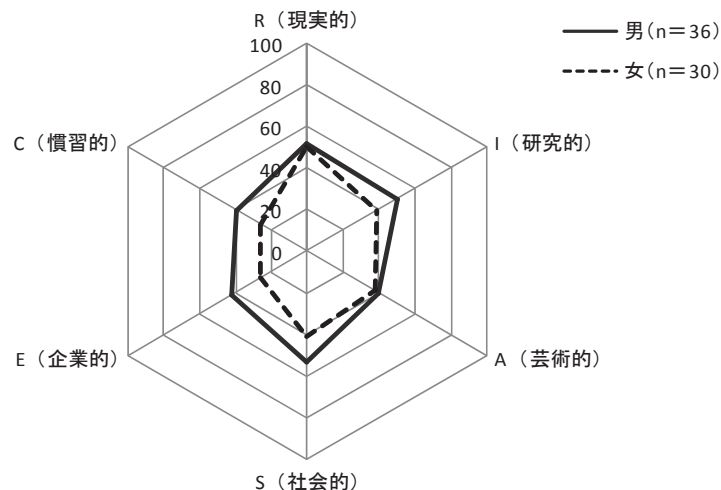


図2 男女の職業興味領域における興味の六角形
(各領域の平均パーセンタイル順位をグラフ内に記入し、線で結ぶ)

5 考 察

理学療法養成学校における職業興味傾向について、VPI 職業興味検査を用いた複数の先行研究^{2~5)}が行われてきているが、これらはいずれも対象者を男女混合としており、性別による検討は行われていない。

VPI 職業興味検査は、その開発にあたりアメリカ人大学生を対象とした研究⁷⁾においても、また日本人への適応を検討するにあたり日本人大学生を対象とした研究^{8,9)}においても、職業興味領域には、性差があることが示されている。そのため、理学療法学科在籍の学生においても職業興味傾向に性差があるのか、第1報⁶⁾で検討を行った。その際、専門基礎科目の概ねの履修と臨床基礎実習と呼ばれる短期見学実習を終え、理学療法士という職種に対する基本的な知識がある程度備わったと考えられる、2回生を対象とした。

第1報では、性別による明らかな差は認められなかったが、職業興味パターンについては、男子ではSER (社会的, 企業的, 現実的), 女子ではRAS (現実的, 芸術的, 社会的) となり、性別によって異なるパターンを示した。この結果から、同じ職業を目指していても、職業興味・認知の特徴については、個々の特性はもちろん、性別にも特性があるのではないかと考えられた。そのため、更に検討を進めた。

(1) 全体および性別による職業興味パターン

全体の職業興味パターンは、RSI (現実的, 社会的, 研究的) であった (図1)。これは、人を援助したり、人と一緒に活動することを好み (S 尺度), 機械や物を対象とする具体的な仕事や活動に関心が強く (R 尺度), 研究的・探求的な仕事や活動 (研究や調査) を好む (I 尺度) 傾向にあるといえる。また、性別による職業興味傾向は、男子ではSRI (社会的, 現実的,

研究的), 女子では RSI (現実的, 社会的, 研究的) のパターンを示した (図 2).

VPI 職業興味検査において理学療法士は, 「SIR (社会的, 研究的, 現実的)」のパターンを示す職種の一つ¹⁰⁾とされている. 今回の結果では, 全体, 男子, 女子, いずれにおいても上位 3 つの尺度は「S」「I」「R」であり, 理学療法士のパターン「SIR」に類似していた. このことから, 全体, 男子, 女子それぞれが平均的な理学療法士という職業領域に準じた集団であるといえる. 看護学生を対象とした報告¹¹⁾では, 男子, 女子のそれぞれの興味領域のうち, 上位 2 つの領域 (R: 現実的, S: 社会的) が同じであり, 男女に関係なく看護師を目指す学生の特徴が存在すると述べている. これは, 本研究と同様の結果であり, 同じ職業を目指す学生では性別に関係なく同じ興味領域を持つと考えられる.

また, 第 1 報 (2011 年度対象者 30 名) では, 全体は SRA (社会的, 現実的, 芸術的) を示し (図 3), 男子では SER (社会的, 企業的, 現実的) (図 4), 女子では RAS (現実的, 芸術的, 社会的) (図 5) を示し, 性別で異なるパターンとなり, 男子では E (企業的), 女子では A (芸術的) といった, 理学療法士の示すパターンとは異なる興味領域が上位にあがっていた. これは, 第 2 報 (2011 ~ 2013 年度対象者 66 名) となる本研究と異なる結果であった. これについては, 個々の学生や実施年ごとに見た場合, 様々な興味傾向を示すが, 母集団が大きくなると, 平均化されることが要因ではないかと考えられる.

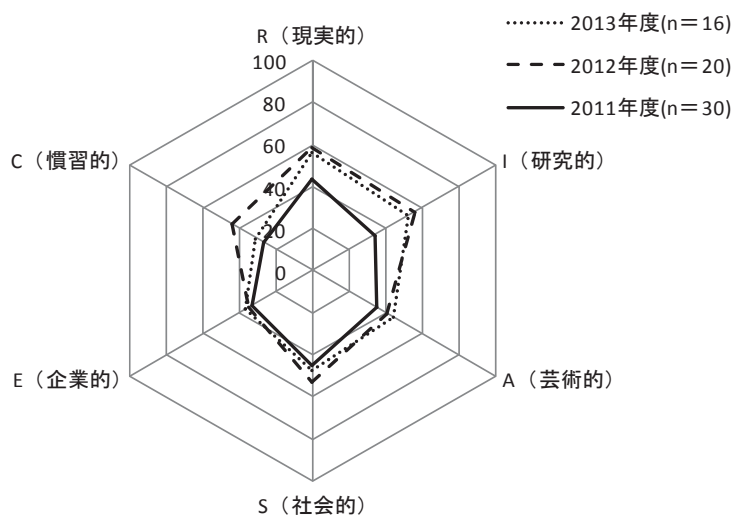


図 3 各年度の職業興味領域における興味の六角形
(2013 年: RIS, 2012 年: RIS, 2011 年: SRA)

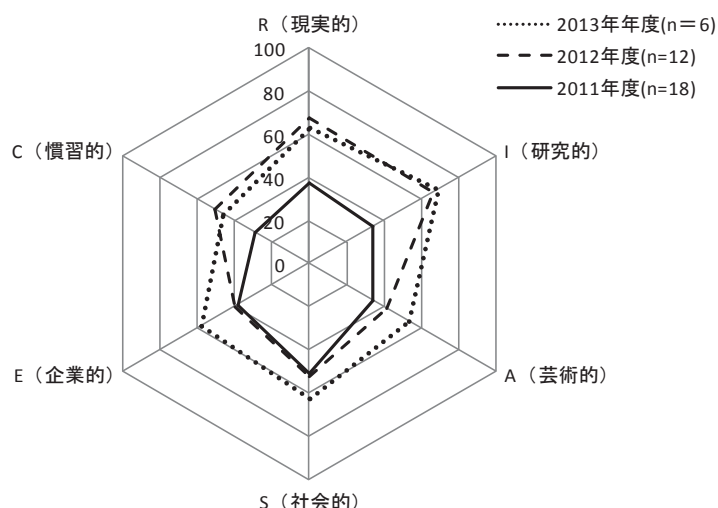


図4 各年度ごとの男子の職業興味領域における興味の六角形
(2013年：IRS, 2012年：RIS, 2011年：SER)

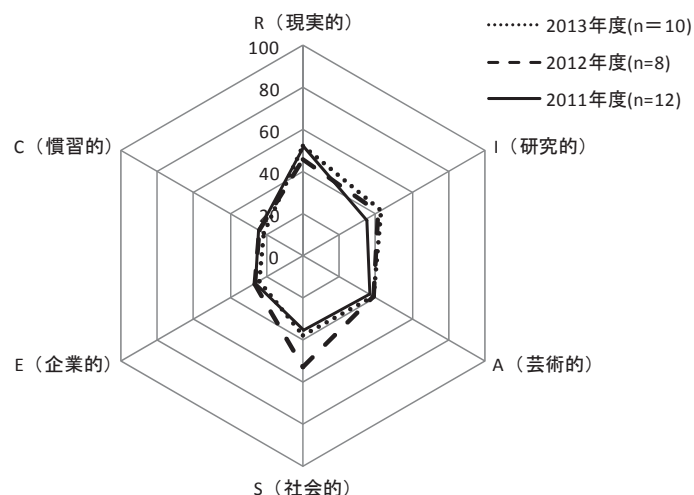


図5 年度別ごとの女子の職業興味領域における興味の六角形
(2013年：RIA, 2012年：SRI, 2011年：RAS)

(2) 性別による職業興味の分化

VPI 職業興味検査では、パーセンタイル順位値が85以上を「興味の高い領域」、16～84を「普通」、15以下を「興味の低い領域」と判断する。また、パーセンタイル順位の最高値と最低値の差が30未満の場合「分化していない」、30～50は「まあ分化している」、51以上「よく分化している」と読み取る。

本研究では、男女ともに6つの職業領域のいずれにおいても20～60パーセンタイル順位値の間に収まっており、また、最大値と最小値の差は男子14.5、女子24.5であった(図2)。この結果から、男女ともに、職業興味傾向として、職業認知に大きな偏りがなく、いろいろな領域に興味を持っていると言えるが、反面、特別に興味・関心を持つ領域・あるいは関心を持

たない領域，といった特化した興味領域が無く，職業興味が分化していない（未分化）と言える．これは第1報も同様の結果であった．

本学で実施している新入生対象アンケート（2012年度学習実態調査より）において，理学療法学科学生の入学理由（25項目のうち3項目を選択）で選択率の高かった上位項目は，①就学意欲を理由とするもの（学びたい学問分野がある，資格や免許の取得），②環境因子に因る理由（施設・設備の充実，キャンパスの立地・環境のよさ，自宅通学），そして③学力的理由（入試難易度が合っていた）が挙げられている．また，大学志望，学部・学科志望度（2013年度学習実態調査より）については，2012年度本学科入学生では，本大学，あるいは学部・学科志望度が第二希望以下であった学生は全体の15%，2013年度では25%となっている（表3, 4）．このように，入学理由が主として②や③であった場合や，本意でない入学であった場合，将来就くであろう職業や現在学んでいる勉強内容に対する不安や迷いを抱えている学生がいることも考えられる．卒業後の進路を決めた学科に在籍しているからといって必ずしも，特化した職業興味を持っているわけではないことが示された．

表3 2012年度 理学療法学科入学生の大学志望度×学部・学科志望度
クロス集計（大学実施：学習実態調査より）

(n = 39)

		学部・学科		
		第一希望	第二希望	第三希望以下
大学	第一希望	40.4% 16人	0.0% 0人	0.0% 0人
	第二希望	45.0% 18人	0.0% 0人	0.0% 0人
	第三希望以下	12.5% 5人	2.5% 1人	0.0% 0人

表4 2013年度 理学療法学科入学生の大学志望度×学部・学科志望度
クロス集計（大学実施：学習実態調査より）

(n = 37)

		学部・学科		
		第一希望	第二希望	第三希望以下
大学	第一希望	57.5% 23人	0.0% 0人	0.0% 0人
	第二希望	17.5% 7人	0.0% 0人	0.0% 0人
	第三希望以下	17.5% 7人	5.0% 2人	2.5% 1人

(3) 性別による興味尺度の比較

性別による職業興味領域の違いについて、これまでにいくつかの報告がなされている。日本人大学生に対する VPI 職業興味検査の適応に関する研究^{8,9)}では、複数の専攻学科（文系，理系，医系など）に在籍する大学生を対象とした場合，男子は女子に比べて R（現実的），E（企業的）の領域が有意に高く，女子は男子に比べて S（社会的），C（慣習的）A（芸術的）の領域が有意に高い結果を示している。また，就業者を対象とした研究¹²⁾においても，R（現実的），I（研究的），E（企業的）については男性が女性よりも有意に高く，A（芸術的），S（社会的），C（慣習的）については女性が男性よりも有意に高かったと報告している。このことから，対象者が大学生，就業者いずれも，専攻領域や職域に関係無く，性別によって興味領域に差異があることが示されている。

本研究では，C（慣習的），E（企業的）の尺度が，女子に比べて男子が有意に高い値（ $p < 0.05$ ）となった。C（慣習的）は，「反復的な事務的色彩の濃い活動を好む」といった単調な側面を持ち，また同時に「几帳面で，ねばり強く，まだ自制心に富んでいる」「人との輪を重んじ，属する集団を一つにまとめることを重視する」¹⁾といった特徴があるが，この尺度は先行研究^{8,9,12)}では，女子が有意に高くなる尺度として挙げられており，異なる結果となった。しかし，報告数は少ないが，本研究と同様に，大学生・就業者の報告^{8,9,12)}とは異なる性別の特徴を示す報告もある。看護学生を対象とした研究¹¹⁾では，女子では RSI（現実的，社会的，研究的），男子では RSC（現実的，社会的，慣習的）のパターンとなったと報告されている。また，放射線学科学生（4 学年）を対象とした研究¹³⁾では，男女ともに，R（現実的）や C（慣習的）が高い値を示したと報告している。本研究においても理学療法学科の学生が，一般的な大学生や就業者とは異なる性別の特徴を持つ集団であることが示唆された。

本研究での結果より，本理学療法学科の学生指導にあたり，教員は以下の点を理解する必要があると考える。①：性別に関係無く同じ領域（R，I，S）に興味を持っている。②：①のとおりに一定の興味領域を共通して持っているが，個々の学生をみた場合，さまざまな領域に興味を持っている。③：慣習的な領域（C：反復的な事務的色彩の濃い活動を好んだり，規則や習慣を重んじる）や企業的な領域（E：新しい事業や計画を企画，組織作り，組織運営などを好む）については，男女間で関心の高さが異なる。④：職業選択をした上で在籍しているが，職業興味は未だ未分化である。

教員は，学生全体に対して，興味領域を広げるとともに，個々の興味領域を深められるよう，学内での一般的な講義に留まらず，学外講師を招いての講演会や各種学会への参加など，多様な学習の場を設け，広く興味・関心を持てる機会を提供する必要がある。また，職業への興味を深めるために，各学生の特性に配慮した指導が求められる。

6 本研究の限界

本研究では、母集団に対して6割弱の参加率となった。これは研究の主旨に同意した学生、つまり「職業興味について」という、日常の勉学と関係の無い調査に興味を持った学生が主として参加したと考えられる。そのため、調査結果に何らかの偏り（参加しなかった学生の傾向を見ることが出来ない）があることも考えられる。

まとめ

- ・2011年度～2013年の理学療法学科2回生に在籍した学生を対象に、性別による職業興味領域の差異について検討した。
- ・対象者全体ではRSI（現実的，社会的，研究的），男子ではSRI（社会的，現実的，研究的），女子ではRSI（現実的，社会的，研究的）のパターンを示した。
- ・6領域の職業興味尺度をそれぞれ男女で比較をした場合，男子がE（企業的），C（慣習的）尺度において，有意に高い値を示した（ $p < 0.05$ ）。
- ・同じ職業を目指す学生では性別に関係なく同じ興味領域を持つと同時に，性別で異なる興味領域を持つことが示唆された。

引用文献

- 1) 独立行政法人労働政策研究・研修機構（日本版著書）原著者 J.L.Holland：VPI 職業興味検査（第3版）手引。社団法人雇用問題研究会，東京，2009。
- 2) 沖田一彦，菅原憲一，他：理学療法学科学生の職業興味特性の分析－VPI 職業興味検査の結果より－。理学療法学 23：519，1996。
- 3) 越智淳子，沖田一彦，他：理学療法学科学生の職業興味特性の分析－3年間のVPI 職業興味検査の結果より－。理学療法学 27：260，2000。
- 4) 内田賢一，菅原憲一，他：理学療法学科専攻学生の職業志向性の変化－VPI 職業興味検査を用いて－。理学療法学 33：466，2006。
- 5) 内田賢一，藤田峰子，他：理学療法学科専攻に入学した学生のVPI（Vocational Preference Inventory）職業興味検査による理学療法士としての適正に関する分析。神奈川県立保健福祉大学誌 4（1）：37-43，2007。
- 6) 越智淳子，吉村 晴香，他：理学療法学科学生の性別における職業興味傾向についての検討（VPI 職業興味検査を用いて）。保健医療技術学部論集 6：23-31，2012。
- 7) Holland, J. L., Whitney, D. R., et al.: An empirical occupational classification derived from a theory of personality and intended for practice and research. ACT Research Report No.29. Iowa City: The American College Testing Program. 1969.
- 8) 渡辺三枝子，松本純平，他：Holland の職業選択理論の日本人大学生への適用に関する研究（1）。日本進路指導学会研究紀要 3：2-9，1982。
- 9) 渡辺三枝子，館暁夫，他：日本版VPIの開発に関する基礎的研究 5. パーソナリティ・タイプに

おける性及び学部の効果について. 日本教育心理学会総会発表論文集 26: 370-371, 1984.

- 10) VPI 研究会: VPI 利用者のための職業ガイド. 株式会社日本文化科学社, 東京, 2005, pp.27.
- 11) 近藤裕子, 白井瑞子, 他: 看護学生の職業興味領域の検討: 男女学生の比較. 香川医科大学看護学雑誌 7 (1): 49-53, 2003.
- 12) 労働政策研究・研修機構「職務構造に関する研究—職業の数値解析と職業移動からの検討— 第2章 職業興味と職業価値観: 仕事に関する指向性の検討」<http://www.jil.go.jp/institute/reports/2012/0146.htm> (2013/9/30 アクセス)
- 13) 八木浩史, 近藤裕子: 徳島大学医療技術短期大学部診療放射線技術学科学生の職業興味領域の検討 (一般), 徳島大学医療技術短期大学部紀要 7: 111-126, 1997.
- 14) 公益社団法人理学療法士協会「【日本理学療法士協会】協会について, 資料・統計, 会員の分布」http://www.japanpt.or.jp/03_jpta/about_jpta/05_index.html (2013/9/30 アクセス)

参考文献

- 1) 葦澤力, 他: 理学療法学科2年次生の職業興味と臨床実習との関連について. 理学療法学 34: 202, 2007.
- 2) 近藤裕子, 他: VPI 職業興味調査による看護短大生の職業興味領域に関する縦断調査. 香川医科大学看護雑誌 3 (1): 5-9, 1999.
- 3) 編) W.M. ウィリアムズ, 訳) 吉井弘: 職業選択の倫理 社会学的倫理を目指して. 誠信書房, 東京, 1983.
- 4) 坂爪洋美, 他: 大学生の職業興味の特徴と安定性の検討: 性差ならびに所属学部による違い. 経営行動科学学会年次大会発表論文集 3: 138-143, 2010.

(おち じゅんこ 理学療法学科)

(しらほし しんいち 理学療法学科)

2013年9月30日受理

